滋賀県の植物について

北村四郎

Siro Kitamura: Notes on Flora Ohmiensis

滋賀県植物図 1968年に我是滋賀県植物誌を編集し、保育社から出版したが、1969年に、滋賀県自然記念物緊急調査団の一員として、岡本省吾、本郷次雄、村田源等の其他の方が私と共に滋賀県の植生図（5万分の1と20万分の1）と主要動植物図をとりまとめた。これは文化庁が企画し、滋賀県教育委員会が国の補助を得て実施したもので、20万分の1植生図を1972年に文化庁が発行し、国土地理協会で頒布している。

この調査で面白く思ったのは、滋賀県では、ブナ帯すなわち冷温帯の太平洋側型の植生のところにはモミがあるが、日本海側型の植生のところ、すなわち多雪地带ではモミがほとんどなく、ダイスギ（ウラスギ）がある。滋賀県の西部では北陸山にはモミが多く、比良山から北はモミが少なく、ダイスギが多い。尾根に沿いにダイスギのあるのが著しい。ところが京都府では、モミは日本海側にも可成り入っている。たとえば、宮津に近い成相山の尾根すじにモミがある。これから西はモミは日本海側にも見られる。

滋賀県の天然記念物 醒が井の断桜は枯死して、1973年、国の天然記念物が解除された。これによくている西明寺の断桜が1974年3月5日、滋賀県の天然記念物に指定された。西明寺の断桜は大上郡甲良町西明寺の経門を入った左側、円教坊跡の西北隅にある。もっと円教坊内の東側にあったが、昭和37年名神高速道路敷設に伴って移築しに移植した。樹高3.8m、目直し96.5cm、枝張の東西9m、南北6.47m、10月頃から咲き始め11月末から12月初めにかけて開開、翌年4月頃まで咲き続ける。醒が井の断桜とよく似ているが、葉の表面の毛は、醒が井のより少し少ない。醒が井の断桜と同様に、冬桜の一品種であろう。私は滋賀県植物志17頁上から2行目に「ヤマザクラであるが」としたのは誤りで「フユザクラであるが」と訂正したい。

敷旨コウヤマキ 滋賀県甲賀郡信楽町勧善玉桂寺境内 滋賀県植物誌19頁。1974年3月5日に滋賀県の天然記念物に指定された。

滋賀県の薬用植物 滋賀県植物誌24頁「延長5年（927）藤原忠平等の編集した「延喜式」巻37の典薬寮の諸国進年料の薬叢に、近江国に73種として46種をあげている」の46を72に訂正する。また、「木香は中国の西部からヒマラヤに産するSaussurea Lappa C. B. Clarke や Inula racemosa Hooker f. が本物であろう」としたのは、「ヒマラヤ産する Saussurea costus (Falconer) Lipshiz syn. S. Lappa C. B. Clarke が本物である」に訂正する。同頁下から2行目、射干クラスアフキヒオウギ、牛膝イノコッテは、近江73種の中になないので消す。

延喜式巻37、典薬寮の諸国進年料の薬叢に、近江国73種とあるのは72種である。
和名は平安期の和名である。
1 青木香16斤。サウモク近江産はウマノスズカサの根であろう。新編本草にはSaussurea costus (FALCONER) LIPSHIZである。2 黄芩7斤13両。ヒララギ、ヤマヒララギ、ハヒノハ、キサノキ、現代の何かわからない。狩谷長弁はメギのことであろうとする。小野薬山はチャッパギクを和の黄芩とよび来るという。中国には、コガネヤナギ、コガネバナ Scutellaria baikalensis GEORG 3 商鹿15斤、オムナカウラ、オムナカツクサ、現代センキュウの名でCnidium officinale MAKINOを栽培する。これは中国原産であるが、平安期にあったかどうか。4 香薷15斤、イヌエ、イヌアラタキ、現代のイヌコウジョと考えられる。5 菰陳薬6斤、カラヨモギ、ヒラヨモギ、アラヨモギ、ヒキヨモギ、カラオハギ、名から判断すると中国から伝えたものを栽培したと考えられるが、近江野生なれば、現代のカワラヨモギを適てることが考えられる。6 黄連2斤14両、カクマクサ、カリマクサ、ヤクマクサ、ヤマクサ、近江野生ならば、現代のオウレン、キバオウレン。7 前胡10斤5両、ノセリ、コマセリ、ウタナ、クチタケ、近江野生では、現代のノダケ。8 王不留行20斤2両、カサクサ、スカクサ、スカクサ、スカクサ、中国のも古代のものはよくわからない。李時珍の本草綱目のはドウカソウで、現代はこれが一般に薬用とされているという。平安期に近江産では何であったか。
9 薑節8斤5両、ツマメタケ、ツマメ、アラマクサ、現代のオヘビイチゴ。10 知母6斤10両、ヤマシ、ヤマシコロモ、ヤマシコロ、中国の知母はハナスゲAnemarrhena asphodeloides BUNGEで徳川期には日本には栽培され、今に続いているが、平安期に既にあったか。11 枚杷13斤3両、クコ、ヌミクスリ、現代のクコ。あるいは中国から薬用に持ち込まれたのが野生化したことが考えられる。12 黄菊花1斤2両、カハラオハギ、カハラヨモギ、キク、カラヨモギ、現代のキクの黄花。13 桃梗35斤、アリノヒフキ、アリノヒフキクサ、オカトキ、現代のキキョウ。14 薺柴香5斤10両、カハネクサ、クレノハシカミノウト、日本の高良薬はAlpinia officinale HANCEである。日本には冬が寒くて栽培できない。近江ではハナヒヨウガA. japonica (THUNB.) MIQ.が考えられる。15 薏苡5斤1両、オネコロ、トコロ、現代のオニドコロ。16 白蔦36斤、オケラ、ウケラ、現代のオケラ、中国のオオオバノオケラAtractyloides ovata (THUNB.) DC.で日本では徳川期には栽培していた。17 狼牙14斤、コマツギ、オホカマクサ、小野薬山の本草綱目唐蒙では、ダイコンソウを薬屋で狼牙として買うとある。これなら近江に普通にある。18 枳実4斤8両、カラタチ、現代のカラタチ。19 深漆15斤5両、ハヤヒトクサ、現代のトウダイグサ、中国のと同じ。20 漆漆1斤8両、ヤマアサ、21 菓薬1斤1両、アヤメクサ、スミクサ、現代のセキショウ、中国のと同じ。22 石藜5斤、イハカシハ、ノノカウ、イサクサ、ヒトツバ、現代のヒトツバ、中国のと同じ。23 漏蘗9斤、クロクサ、アリクサ、ナミクサ、近代の何にあるか不明。中国のもうない。24 黄薙13斤、キハダ、現代のキハダ、中国のと同じ。25 薏苡2斤4両、サキクサ、ミノハ、現代のソバクサ、中国のと同じ。26 龍胆、エヤマクサ、タツノ井クサ、ニカナ、リムタウ、ヤマヒコナ、現代のリンドウ、中国のと同じ種で、その変種。27 玄参13斤、ヨシクサ、近江ではヒナノウスツボやオホヒナノウスツボがある。中国の玄参はゴマノハクサで、これは日本にもあり、徳川期には正しく使用していた。28 苦参39斤、クララ、マヒリクサ、マトリクサ、カツネクサ、ニカナ、現代のクララで中国のと同じ。29 藥本5斤8両、サカモチ、サハソラン、サハソラン、ソラシ、ソラシ、サカモチは中国から伝来し日本に栽培するが、平安期に入ってい
たの。中国の Ligusticum sinense Oliver で、カサモチではない。30 芹茄、ムコキ、ムコキノカワ、現代のウコギ、中国のも同じ。中国原産。31 紫苑11斤、ノシ、シオニ、オホニ、カノシタ、現代のシオは中国の紫苑ではない。シオは近江に野生はない。雲州本には紫苑とある。紫苑、チチナハクサ、チチハクサ、蘭山は啓蒙で紫苑は現代のハルトナオにあてる。牧野富太郎博士は中国の紫苑にアキノタマラウソをあてる。32 鷹簸花1斤10両、ツッシノハナ、現代のツッシ類の花。中国の羊藿は Rhododendron molle G. Don で紫花を咲く。日本にはない。33 杜仲4斤、ハヒマユミ、マユミノキカワ、コソマユミ、現代のマユミまたはツルマサキを利用のであろう。中国の杜仲は Eucommia ulmoides Oliver で、徳川期まで日本には輸入されていなかった。34 漬漬3斤、ナマ井、ヲモタカ、現代のヘラオモダガ、中国のと同じ。35 氷玄芒1斤8両、ツツマ、ツツマ、タマツ、現代のジュズダマ、中国のと同じ。これは古代に中国から輸入したものかもしれない。今は野生状で。36 細辛26斤8両、ヒキヒタクサ、ヒキヒタイ、ミラノネクサ、ミラネクサ、ミヤマノユ、現代のウササイシン、中国のと同じ。近江にはウササイシンがあるので、上のようにしたが、ミヤコアオイやアツミカンアオイも混用したかもしれない。37 僕奈7斤、クルベクサ、ハマ、ヤマシ、ヤマトコロン、現代の何か不明。38 白芷9斤、ヨロヒクサ、ミラネクサ、サハソラン、サハウト、カサモチ、ムクサ、ムハ、ヒミル、現代のヨロヒクサは近江に野生は知られていない。然し栽培したことも考えられる。中国の白芷はヨロイグサである。39 白戟1斤2両、ヤマカカミ、カカム、ヤマカマ、小野蘭山は啓蒙に和産なし、漢種享保年間で伝来したという。ビャクレンは現在もあるが、平安期の何か。雲州本では白前、ノカカミ、カカム、カカミクサノネ。40 商陸2斤8両、イオウスキ、ヤマコハウ、現代のヤマゴボウ、中国の同じ。41 木解2斤8両、スクナヒコノクサネ、イハクスリ、雲州本、木解、現代のムクガ、それら木解のづぐらも新修本草にはない。42 芦薬1斤、エヒクスリ、エヒクサ、ヌミクスリ、現代のジャクヤク、中国のと同じ。近江で栽培したであろう。近江に野生のヤマシヤクサもある。43 白薬1斤3両、ミナシクサ、ミナシクサ、ミナシカ、クルヒクサ、クルヒクサ、アマクサ、アマクサ、カルナ、中国の自生はフナバラソウで、徳川期にもフナバラソウに混用している。平安期にもフナバラソウであったか不明。44 松薬10両、マツノコケ、サカリコケ、サルオカセ。45 松脂10斤7両、マツヤ。46 大青2斤12両、ハトクサ、クルヌクサ、クルクサ、小野蘭山は啓蒙にタデイの葉とする。47 土瓜6両、ヒカモ、現代のヒョウタン、新修本草になく、土産の瓜の因であろう。中国の安东、蘭州。48 瀧栽培1斤2両、ナデシコ、トコナツ、現代のカワラナデシコ、中国の瀧栽培はセキチクやカワラナデシコである。49 桟橋、カラスリ、オシノヒタク、ブスノヒタク、現代のカラスリとはキカラスリ。中国のキカラスリの変種 Trichosanthes Kirilowii Maxim. である。50 大戟10斤1両、ハヤヒトクサ、ヒヒラキ、オヒヒラギ、近江のはタカトウダイ Euphorbia pekinensis var. japonensis Makino か。中国のは E. pekinensis Reh. 51 地榆4斤2両、エヒネ、アヤメクサ、アヤメタモ、アサコ、エヒクサ、ヤマフジ、小野蘭山は現代のウレモコウ Sanguisorba officinalis L. にあてる。中国のと同じ。52 菊根22斤8両、クスノネ、クズカズラノネ、現代のクズの根。中国のも同じ。53 桑螵蛸1銖、ヲホチカフクリ、ラキナフクリ、ラキナフクリ。54 白殻1両、コタネノカラ、カヒコノシマタル、カヒコ。55 地脱皮1両、クチナノハモヌケ、ヘミノモヌケ。56 干地黄、サホヒメ、現代のジオウ Rehmania.
glutinosa (Gaertner) Liboschitz の乾したものの、中国の原産。近江では栽培していたのである。57 福子 5 斗、カへ、現代のカへの種子。中国は別種、Torreya grandis Fortune 58 萩蔓 1 斗、ヤマツイモ、ヤマノイモ、現代のヤマノイモ Dioscorea japonica Thunb. 中国のは D. Batatas Decaisne である。59 桃仁 1 斗、モノノサネ、モノノミ、現代のモノノミの種子、中国のも同じ。60 麦冬 1 斗 5 斗 5 合、ヤマスケ、現代のジノヒゲおよびコヤブラ。中国のも同じ。61 天雄 6 合、現代のトリカプト属の 1 種の附子を植えて子ができないので、年を経て長大なもの。62 鳥頭 6 合、同じくトリカプト属の 1 種の附子を植えて子を生ずると母が縮小したもの。近江には、カウチブシ、オオダイブシ、イブキトリカプト、キタヤマブシがある。63 除子 6 合、オホトクハ、ナマエノキ、タツノキノキ、本草和名では、薬用実は除子実とし、和名ハマハピ近江国に植する。これから、薬用するわけのハマゴウにあける。現に湖岸にハマゴウが野生状であるが、これが天然のものか、または人が植えたのか識別したのかも知れない。64 決明子 2 合、エビスクサ、エビスクスリ、エヒョクサ、エリフラサ、現代のエピグサ Cassia obtusifolia L. はアメリカ原産であるから、平安期にはあることが知らわれ、新修本草の決明子は東南アジア原産の C. Tora L. である。平安期にはこれが近江時でも栽培されていたと考えられる。65 皂子 2 合 2 合、ヒルシハ、マキサ、ハマハピ、中国の蛇蛻 Cnidium Monnieri Cuss. は日本に産しない。御前期には現代のヤブリジマにあてたり、関山は啓蒙に「古書類に誤って水草のヒルシハの実を蛇蛻子と称し」とし、現代のハマザリにあて。近江にはハマザリは野生しない。66 芝苗子 1 合、ツホミクサ、ツミスミクサ、オホミクサ、オホミクサ、トニヒルクサ、現代のハシリドコロ、中国の芝苗はこれとちがう Hyoscyamus niger L. var. chinesis Makino である。67 茜子 4 合、アフヒノミ、現代のフェアオイの種子、中国のも同じ。近江栽培。68 亀童子 8 合、オオバナ、中国のも同じ。69 亀童子 3 斗、カハハシカミ、カハハシカミ、ハシカミ、イタチギ、中国の亀童子は栽培年間に渡来し、現に栽培する。平安期にも渡来したのが栽培されていたのか考えられるべきである。70 極楽 2 合、ナハシハカミ、ハンカミ、フサハシカミ、現代のサンジョウ、中国の別種 Zanthoxylum simulans Hance である。71 白花木瓜実 10 合、シトミ、モケ、現代のボケの実。中国の木瓜は別種 Chaenomeles cathayensis (Hemsley) C. K. Schneider との白花はシロバナボケと解すれば、普通ボケは赤花だから、どうして白花を用いたのかわからない。何か別種が誤って転写されたとすれば、白花のあとに量が示されていない。72 山茱萸 2 合、イタチハシカミ、ヤマハシカミ、カハハシカミ、カタハシカ、サハクミ、現代のサンジュユ Cornus officinalis Sieb. et Zucc. は栽培年中に觸葉に渡ったと啓蒙は伝えており、別に朝鮮からも入っている。中国の山茱萸ではない。平安期の山茱萸は何であったか。

以上72種ある。斤、両、銖（しゅ）は量単位の単位である。平安期の和名は、延喜式の諸写本の漢名につけた和名や、本草和名、医心方、和名抄、康頤和名本草、撰撰字鏡などの漢名に対する和名を集めたもので、日本古典全集延喜式巻37、付録和名考異によってもである。

近江は土地の面積が狭いのに、延喜式の典薬実、諸国の進年料の薬草に、最も多く、72種もある。近江特に湖東には、古くから朝顔や中国からの帰化人が多い。その人達は薬用植物の知識をもち、大樹から種子や苗を伝えて栽培し、近江は薬の産地として知られていたのであるが、大樹から伝わり、平安期に栽培されていたものが、その後戦乱などで絶え、再び徳川時代
に輸入されたものもある。徳川期の輸入が明記されているので、それ以前に日本にはなかったと考えるのは行き過ぎかもしれない。

伊吹もくさ。近江の伊吹もくさは古来有名で、小野蘭山は本草畑目啓蒙義のところに「江州伊吹山の花をなして香気をしに故にその熟茶最上品とす」とある。

私が滋賀県植物誌9頁にて、伊吹山のところで、百人一首の「かくとたに えはいふきのさも草 さしも知らじな もるす思いを 実方朝臣（後拾遺集）」を引用したのは誤りである。このいぶきは栃木県の伊吹山のようなである。吉田東伍、大日本地名辞書に、「さて伊吹山のことは能国が昇元領に、此山は美濃と近江との境なる山にあらず、下野なりと記したるよし頼昭の袖中抄（1185～1190）にみゆ」とあって、この歌をあげてある。栃木県の伊吹山は、「吹上村の城山の峰を指すことし、標高80余米」とある。

滋賀県植物誌に追加の植物
ラン科 アキザキヤツシロラン、大津市（北村：植分地23巻81頁）。サラン 高島郡明王もくさ（村田源：植分地25巻185頁）。ヤナギ科ヤマトヤナギ Salix yamatensis KOIDZUMI＝サイコツキツネヤナギ×オエヤナギ蒲生郡ジャクナガ谷 G. KOIDZUMI 1930、鶴岡山 Y. ARAKI, Z. TASHIRO, 御池岳 Chutaro HASHIMOTO。ユキノシタ科 プダヤツシ高島郡赤坂山一明王もくさ（村田源：植分地26巻30頁）。バラ科 エチゴキジムシロ 東浅井郡金嶺岳（村田源：同上）。カライトウソウ 高島郡奥マキノ三国山（谷元峰男：植分地25巻32頁）。キンバッタヤマメザクラ（ヤマザクラ×キンキメメザクラ）坂田郡伊吹山（川崎哲也植研48巻332頁）。チョウセンキンミズヒキ 板田郡伊吹山（村田源：植分地25巻60頁）。ミレ科 ツルタチツボスミレ 東浅井郡金嶺岳（村田源：植分地同上）。ゴマノハグサ科 オオバミソホオズキ 金嶺岳（村田源：植分地同上）。

ヤナギ雑錄 私は本年三月から京都大学理学部植物学教室の標本室にあるヤナギ属の標本を整理した。小泉源一先生がヤナギを研究されたが、戦後研究されずに山積された標本を整理した。その為に当時野でヤナギの変異をよく知る必要があり、同一の木から花と葉をとる必要があった。整理の結果、私の考えを簡単に報告する。コンゴウバッカヤナギ Salix ultima KOIDZUMI は何かの雑種であろうと思われるが、バッカヤナギ×サイコツキツネヤナギを思わせる。これとヤマトヤナギは、近年の日本植物誌から姿を消しているが再認すべきものと思う。チチブヤナギ S. kenoensis KOIDZUMI も石灰岩に生えるはっきりした種で、これも再認すべきものである。

アマヨナギ S. torrentis KOIDZUMI et ARAKI は雌花はネコヤナギ、葉をつける枝はオノエヤナギでこれは消されるべきものと思う。ナガバノネコヤナギ S. Arakiana KOIDZUMI とタンバヤナギ S. tamaeensis KOIDZUMI はともにネコヤナギであろうと思う。キイバッカヤナギ S. kinokuniensis KOIDZUMI はバッカヤナギと思う。ホソバオクヤマヤナギ S. aridaensis KOIDZUMI はヤマヤナギ Salix Sieboldiana BLUME と思う。（北村四郎）